

旭労災病院ニュース

病院情報誌 第106号 平成26年9月1日発行

発行所：旭労災病院

〒488-8585

尾張旭市平子町北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

薬剤溶出性バルーン (Drug Eluting Balloon : DEB) について

循環器科部長 水野 広海



平素は病診連携にご協力賜わり誠にありがとうございます。

冠動脈インターベンション(PCI)はバルーンによる拡張⇒ステント留置術⇒薬剤溶出性ステントの登場と日進月歩で進んでまいりました。

この8月より新たなデバイスが使用可能となりました。題名にある DEB です。薬剤溶出性ステントは金属製のステントの表面にポリマーが塗ってあり、そこに免疫抑制剤などの細胞増殖を抑制する薬剤が含まれて局所で作用します。今回、DEB ではバルーンの表面に Paclitaxel が塗布されており、バルーン拡張時に血管壁にバルーン表面の薬剤が血管壁に速やかに移行して局所(血管壁)で作用し再狭窄を防ぎます。バルーン拡張の短時間で薬剤が血管壁へ移行するように親水性のスペーサーが薬剤とともに塗布されています。血管壁へ移行する薬剤量は塗布されている薬剤量の約5.5%と言われていますが、その後2週間以上平滑筋細胞の増殖抑制効果が持続することが実験データで分かっています。

現在、日本での適応は冠動脈ステント内再狭窄病変に限られております。また、術後は少なくとも3カ月の2剤併用抗血小板療法が必要とされています。

DEB の効果ですが、Pilot study で DEB と通常のバルーンをステント再狭窄病変に使用した成績を比較したところ1年後の再狭窄は DEB で4%、通常のバルーンで37%でした。5年後のフォローアップでも DEB の再狭窄率は9.3%に対して通常のバルーンでは38.9%と DEB の再狭窄予防効果が示されました。日本での治験においても同様の結果が得られております。

今後、ステント再狭窄を繰り返している患者さんの治療に使用が広がってゆくものと考えます。当院でも使用可能になっており、既に使用を始めております。ステント再狭窄に対する切り札となる事を期待しております。

アレルギー性鼻炎

耳鼻咽喉科副部長

片平 信行



アレルギー性鼻炎は鼻粘膜の I 型アレルギー性疾患で、ヒスタミンを介した副交感神経反射やメディエーターの血管・分泌腺への直接作用により発作性反復性のくしゃみ、水様性鼻漏、鼻閉などの症状を特徴とします。現在 30~40%の有病率といわれており、1960 年代から増加傾向にあります。その原因としては住環境の変化や、乳幼児期までの衛生的環境下での生育による体質の変化などが挙げられています。原因抗原によって通年性と季節性に分類することができ、通年性で有症率の高い抗原はダニとハウスダスト（室内塵）であり、季節性では主にスギ、ヒノキ花粉などです。通年性は 10 歳代の男児に多くみられ、他のアレルギー疾患を合併していたり、アトピー性皮膚炎や気管支喘息をすでに発症していることも少なくありません。それに比べ、季節性は 30~40 歳代に多く、通年性に比較して眼症状が強いですが、気管支喘息などの下気道疾患の合併は少ないといわれています。

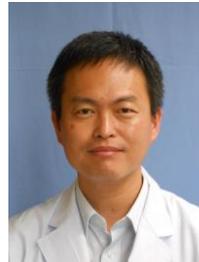
アレルギーの診断としては鼻鏡検査、鼻汁好酸球検査、血清総 IgE 量の測定などがあり、抗原の検査として皮膚検査、血清抗原特異的 IgE 検査、鼻粘膜誘発テストなどがあります。

治療の原則は抗原の回避、除去であり、マスクの着用や生活環境の見直しや、細めな清掃が重要です。しかし、症状の自然寛容は起こりにくいため、治療目標である症状のない安定した状態を維持するために、患者さんは内服や点鼻薬といった薬物治療を併用することが一般的です。特に花粉症では花粉飛散の初期からの薬物療法が有効といわれています。他の治療法として手術療法や特異的免疫療法があります。手術療法は主に、鼻粘膜を変性させアレルギー反応を減弱化するレーザー手術や電気凝固術などと、鼻腔形態の整復を目的とした鼻中隔矯正術や下鼻甲介粘膜切除術などがあります。薬物抵抗性の鼻漏に関しては後鼻神経切断術などもあり、症状に応じた治療法を選択します。特異的免疫療法とは原因抗原が判明している患者さんに対し、少量の抗原を長期に繰り返し皮下注射を行い、症状の軽減を図る治療法です。一般的に薬物治療に抵抗性で、長期寛解を希望する患者さんに適応となります。しかしアナフィラキシーショックなどの副反応の報告や、抗原エキスの種類が限定されること、長期の継続定期通院を要するなどのデメリットがあります。近年では抗原エキスを舌下に投与する舌下免疫療法が注目されています。非侵襲的で自宅で施行可能であり、皮下注射と同等かそれ以上の効果が期待できるといわれています。現在はスギ抗原のみの適応（スギ抗原エキスは 2014 年 1 月に製造販売が承認され、10 月から発売予定となっています。）ですが、ダニ抗原に対しても治験が開始されており、今後の新しい治療法として期待されています。

旭労災病院まつり「第2回健康チャレンジ」について

糖尿病内分泌内科部長

小川 浩平



平成 26 年 7 月 26 日土曜日、昨年に引き続き、旭病院まつり「第 2 回健康チャレンジ」が開催されました。健康チャレンジは、「健康な人は健康の維持にチャレンジを、病気の人は健康をとり戻すチャレンジをしよう！」という意味です。

ゲームコーナーでは、射的、わなげ、スーパーボールすくいなど、縁日のように楽しんでいただき、測定コーナーでは骨密度、脳年齢、肺機能、嚥下能力テスト(ごっくんテスト)の各種測定をしました。

今回は 7 月末という暑い時期の開催であり、食中毒予防の展示コーナーを設けました。インパクトをつけようと常温で放置したカレーにカビがびっしり生えた状態で密封された鍋や、飲みかけのペットボトルを放置してガスではちきれそうになったものを展示しました。細菌培養のシャーレを手にとったり、細菌を顕微鏡で直接観察したり、能動的に学べる展示もしました。同じ部屋に感染対策の意識を高める“カンペキ！手洗いチャレンジ”もあり、食中毒予防のよい啓蒙となったと思います。また、ごっくんテストのとなりに嚥下食の試食や嚥下相談なども行いました。さらに 30 分程度の 3 つのミニ講演会(猛暑をのりきる安全な食べ物・飲み物、嚥下機能と誤嚥性肺炎の話、熱中症と食中毒の予防・治療)を開きました。

昨年は子どもがわずか 5 名であったことを反省して、子ども向けの企画を充実させました。「あなたもおいしゃさん！白衣をきて撮影会」は、白衣をきて聴診器で心音を聞いたり、包帯を巻いたり、AED と人形で蘇生訓練をしたり、顕微鏡で血液を観察したりというものです。スタッフがその場で撮影して、すぐに写真をプリントして進呈しました。白衣は院内にある中古をボランティアがミシンで丈を調整して子供サイズに直しました。尾張旭市イメージキャラクターのあさぴーも登場して大人気！白衣の子供たちと記念撮影していました。今回は子どもが 100 名以上来てくれて、まつりらしい感じでした。

当日は 356 名の方が来場され、大変な賑わいでした。昨年は 145 名でしたので予想以上でした。グリーンシティケーブルテレビも取材に来て、ローカルニュースのそらまめ通信で取り上げていただきました。参加者アンケートでは多くの方から、楽しかったので、ぜひ次も来たいとありがたいお言葉をいただきました。今後、さらに発展して病院にも地域にも恒例行事として定着するように努力していきたいと思います。最後に、前日の準備に当日の運営に創意工夫し力を合わせて手伝ってくれた 50 名の院内ボランティアスタッフに感謝いたします。